



現場に飛び出せ！ 躍動するフィールドワーカーたち

社会人類学者

増田 研

Masuda Ken
(環境科学部 准教授)

研究にはさまざまなスタイルがあります。実験をする、文献資料を読み込む、コンピュータで解析する……そして現場に飛び出す。

人と関わらない研究はあり得ません。そして人々の生活する空間は実験室でも書斎でもありません。

今回から始まるシリーズ「現場に飛び出せ！ 躍動するフィールドワーカーたち」では、人が生きる世界に飛び込んで、人と関わり合いながら、その暮らしを写しとる、そんなフィールドワーカーたちを紹介します。

第1回は環境科学部の増田 研 准教授です。

第1回 社会人類学のフィールドワーク

村のテントから

朝6時。テントの外が賑やかになります。

「ケンはまだ起きてるかい？」

「まだ眠ってるよ！」

その声で目を覚まし、もぞもぞとテントから這い出ると、そこには十人を超える人々が私を待ち構えています。こうしてフィールドワーク中の私の一日は始まります。

なんでそんなに遠いところまで出かけていくかつて？ もちろん「そこいなければ分らないこと」ばかりだからです。

社会人類学（文化人類学とも呼ばれます）は、人間の社会や文化の成り立ちを、現地に住み込んで調査すること

で明らかにする学問です。そのための現地調査（フィールドワークといいますが）、つねに人々との関わりをなかで展開されます。



フィールドワークに欠かせない道具

右から、メモ、家計簿、調査ノート、ヴォイスレコーダー、GPS、カメラ。これらを常にカバンに入れて持ち歩きます。



環境科学部／大学院国際健康開発研究科 准教授 増田 研(ますだ けん)
1968年、神奈川県横浜市生まれ。1992年 名城大学文芸学部卒業。1998年、東京都立大学大学院修了。神奈川大学日本常民文化研究所研究員などを経て、2004年に長崎大学に着任。博士(社会人類学)。



私の住まい

バンナの村に滞在している間は、居候をしたり、空き家や学校の空き教室に住まわせてもらったりします。このテントは10年前まで使っていたもので、エチオピアの軍隊用に作られた頑丈なものでした。この周りに毎朝、人びとが集っていたのです。

「薬局」開店

朝早く、夜明けとともに訪ねてくるのは、私に治療してもらいたい人たちです。

小さな子供が母親に連れられておらずと近づいてきます。足の怪我が治らないと言います。切り株が何かで怪我をしたのをそのまま放置していたために、分厚いかさぶたの下にたくさん

の膿を溜め込んでいました。
バンナでは擦り傷、切り傷は日常茶飯事です。日本だったらすぐに消毒して絆創膏を貼ってしまえば済む話ですが、ここではそうもいきません。消毒

しないと雑菌が入って化膿しますし、放っておけばバンパンに腫れて動かさなくなりです。

私は医師ではないので、せいぜいが怪我の治療くらいしかできません。しかし私、がもちこんだ薬の効き目が素晴らしいという噂がたつて、フィールドワーク中のひと頃、私の毎日こんな感じで始まっていました。私が持っていた薬など、日本ではどこでも手にはいるような市販薬ばかりでしたけれど。

人々と暮らすなかで 見えてきたもの

その頃の私は、バンナにおいて急速に普及しつつあった学校教育とキリスト教会のことを調べていました。学校がないところに学校ができ、新しい宗教がもたらされると、社会の仕組みもまた大きく変わります。その変化の方向をきちんと見極めることが必要だったので、毎日の生活はけっして調査だけで過ぎていったわけ

はありません。牛の放牧につき合い、畑作業を手伝い、水汲みをし、教会の日曜学校に参加し、泊まり込みで儀式につき合い……病人を助け。

私のような社会人類学者は、つねに人と関わり、人に取り巻かれながら調査をします。私が知りたいことを知っているのは「現地の人々」ですから、人との関わりを避けていては何もできません。さまざまな問題に直面しながら、ああでもない、こうでもないと考えをめぐらせるのです。

忘れられない「患者」がいました。背中におびただしい数の傷をもつお母さんでした。傷口にはその場しのぎで土が塗りたくられていましたが、そこから雑菌が入り込んで三面化膿していました。聞けば「浮気したことがばれて夫からさんざんムチで叩かれた」ということでしたが、その場の誰一人としてその夫を非難する人はいませんでした。そういう社会なのです。人権とかDVとかいう言葉が



子どもたち

フィールドで人びとと仲良くなる秘訣は、ずばり「子どもたちと遊ぶ」ことです。子どもは外国人にも臆することなく近づいてくれますし、一緒に遊べばすぐに仲良くなれます。

出てくる以前に、「そういう社会なんだ」ということを理解することが必要でした。その場で「こんな暴力、ひどいじゃないか」と言うこともできたでしょう。でも、言いませんでした。それがバンナのしきたりであるのなら、それを頭ごなしに否定するのではなく、なぜ、どのようにその社会が成り立っているのかを知ることが先だと考えたのです。



病の退散を祈る

ある家庭で奥さんの病気が治らないため、早朝に病の退散を祈る儀式をすることがあります。薬を飲んででも治らないときの「神頼み」ですが、人びとにとっては欠かせない儀式なのです。



赤ちゃんの体重測定

予防接種の日、診療所には赤ちゃんを連れてお母さんたちがやって来ます。習いたての数字を、みんなでワイワイガヤガヤ読んでいきます。とても楽しそう。



診療所に集まる人びと

5年ほど前、この村に初めての診療所が開かれました。しかしふだん、人びとはほとんど活用していません。この写真にこんなたくさん子どもたちが写っているのは、この日が予防接種の日だったからです。

「あるべき社会」と 「現にある社会」

私たちの誰もが幸福を願い、そして、社会をより良くしようと頑張っています。私たちは、言わば「あるべき社会」の理想像についてのいろいろな考え方にさらされています。クルマに乗るのをやめて、二酸化炭素排出量を減らそうとか、対立をなくして戦争のない世界を実現しようとか、そういう美しい意見表明は「社会はこうあるべきだ」という理想像に裏打ちされています。

しかし、現実はどうでしょうか？ どれだけ声高に叫んでもクルマは減りませんし、戦争だってなくなりません。理想を掲げて未来のための学問をすることは必要ですが、実際には理想とはほど遠い世界が私たちの目の前には広がっているのです。

知るべきことは、「現にある社会」が、なぜ、どのように、そうなっているのかということなのです。そのための方法として私が選んだのは、現地に住み込んで、人々とともに生活し、同じものを食べて、その暮らしの脈絡の中から「現にある生活と文化」をすくい上げるといやり方でした。

脈絡の中で生きる

バナナの人々と関わるようになって二〇年近くたちます。彼らの暮らしは、ある面では大きく変わりましたが、他の面ではまったく変わっていません。



放牧するブスコ君 (1993年)
今から17年前、私は毎日のようにブスコ君と一緒にウシの放牧をやっていました。生活自体を共にすることで、たくさんのことを学ぶことができました。



現在のブスコ君
20代後半になったブスコ君は、今では結婚し、子どもも生まれ、立派な「一家の主」です。



ブスコ君の息子
ブスコ君の長男の名前は「ケン」です。もちろん私の「研」から取られています。バナナでは同じ名前を持つ者どうしは特別な絆で結ばれます。私もバナナに行くときには必ず「ケン君」にお土産を持っています。

いま、村には小学校と診療所ができました。子どもたちは、勉強にはそれほど熱心ではありませんが、午前中は学校、午後からは放牧と畑仕事というように、勉強と仕事を両立させようとしています。診療所のほうは、あまり活用されていないようです。予防接種を実施しても、赤ちゃん全員が集まるわけではなく、

ワクチンも届けられる途中で半分くらいが使い物にならなくなってしまうています。重病人が訪れても高度な治療はできませんし、町の病院に患者を運ぶための救急車もありません。日本ではたいして問題にもならないようなことが、なぜエチオピアの辺境では重大事になってしまうのか。

忘れ者のアフリカ人が医療の整備をしなかったからだ(だからアフリカはいつまでも遅れているんだ)、そもそもアフリカには財政的な余裕などないのだ(だから援助してあげよう)、いや、アフリカの人たちには伝統的な薬草があるじゃないか(だから新しい技術を持ち込むべきではない)……などなど、いろいろな意見があるでしょう。でも気をつけてください。そういう意見はみな結局のところ「あるべき社会」を語ることに落ち着いてしまっています。

「現にある社会」は、すべて無数の脈絡の中にあります。私たちの生活にある全てのものは、何らかの脈絡なくして成り立ちません。外側から「あるべき社会」像を押しつけるのではなく、まずは内部から「現にある社会」を知り、適切な脈絡に位置づける。そのために私のような人類学者は、せつせと現場に通い続けるのです。

鳥追い

7月、収穫が間近になると、実りをついばみにたくさんの鳥が集まってきます。人びとはやぐらを造り、畑を見張っては鳥を追い払います。

